



夢 十 夜

夏目漱石



青空文庫



青空
文庫

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐すわつていると、仰向あおもむきに寝た女が、

静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷

いて、輪郭りんかくの柔やわらかな瓜実顔うりざねがおをその中に横たえている。

真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇くちびるの

色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しか

し女は静かな声で、もう死にますと判然はつきり云った。自分

も確たしかにこれは死ぬなと思つた。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗のぞき込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱつちりと眼を開あけた。大きな潤うるおいのある眼で、長い睫まつげに包まれた中は、ただ一面に真黒であつた。その真黒な眸ひとみの奥に、自分の姿が鮮あざやかに浮かんでいる。

自分は透すき徹とおるほど深く見えるこの黒眼の色沢つやを眺めて、これでも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕まくらの傍そばへ口を付けて、死ぬんじやなからうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を

眠そうに睜みはつたまま、やつぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私わたしの顔が見えるかいと一心いっしんに聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写つてるじゃありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思つた。

しばらくして、女がまたこう云つた。

「死んだら、埋うめて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片かけを墓標はかじるしに置い

て下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢あいに来ますから」

自分は、いつ逢あいに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待っていていただけますか」

自分は黙うなずって首肯うなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓の傍そばに坐つて待つていて下さい。きつと逢いに来ますから」

自分はただ待つていると答えた。すると、黒い眸ひとみのなかに鮮あざやかに見えた自分の姿が、ぼうつと崩くずれて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫まつげの間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘つた。真珠貝は大きな滑なめらかな縁ふちの鋭すどい貝であつた。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。

湿しめった土の匂においもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。それから星の破片かけの落ちたのを拾つて来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちてゐる間に、角かどが取れて滑なめらかになつたんだらうと思つた。抱だき上あげて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分は苔こけの上に坐つた。これから百年の間こうして待つてゐるんだなと考へながら、腕組をして、丸い

墓石を眺めていた。そのうちに、女の云った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定かんじようした。

しばらくするとまた唐紅の天道からくれないてんとうがのそりと上のぼつて来た。そうして黙つて沈んでしまつた。二つとまた勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して

行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、苔こけの生はえた丸い石を眺めて、自分は女に欺だまされたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜はすに自分の方へ向いて青い茎くきが伸びて来た。見る間に長くなつてちようど自分の胸のあたりまで来て留まつた。と思つと、すらりと揺ゆぐ茎くきの頂いただきに、心持首を傾かたむけていた細長い一輪の蕾つぼみが、ふつくらと弁はなびらを開いた。真白な百合ゆりが鼻の先で骨に徹こたえるほど匂つた。そこへ遥はるかの上から、ぽたりと露つゆが落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を

前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉はなびらに接吻せつぶんした。自分あかつきが百合から顔を離す拍子ひょうしに思わず、遠い空を見たら、
暁あかつきの星がたった一つ瞬またたいていた。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がつ
いた。

第二夜

こんな夢を見た。

和尚おしょうの室を退さがつて、廊下ろうかづた伝いに自分の部屋へ帰ると行灯あんどうがぼんやり点ともっている。片膝かたひざを座蒲団ざぶとんの上に突いて、灯心を搔かき立てたとき、花のような丁子ちやうじがぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱつと明かるくなつた。

襖ふすまの画えは蕪村ぶそんの筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近おちこち

とかいて、寒むそうな漁夫が笠を傾けて土手の上を通る。床には海中文殊の軸が懸っている。焚き残した線香が暗い方でいまだに臭っている。広い寺だから森閑として、人気がない。黒い天井に差す丸行灯の丸い影が、仰向く途端に生きてるように見えた。

立膝をしたまま、左の手で座蒲団を捲つて、右を差し込んで見ると、思った所に、ちやんとあつた。あれば安心だから、蒲団をもとのごとく直して、その上にどっかり坐つた。

お前は侍である。侍なら悟れぬはずはなかりうと

和尚おしょうが云つた。そういつまでも悟れぬところをもつて見ると、御前は侍ではあるまいと言つた。人間の屑くずじゃと言つた。ははあ怒つたなと云つて笑つた。口惜くやしければ悟つた証拠しんこを持って来いと云つてふいと向むこうをむいた。怪けしからん。

隣の広間の床に据すえてある置時計置きどけいが次の刻ときを打つまでは、きつと悟つて見せる。悟つた上で、今夜また入室にゆうしつする。そうして和尚の首と悟りと引替ひきかえにしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きてゐる訳には行かない。綺麗に死んでしまふ。

こう考えた時、自分の手はまた思わず布団の下へ這入った。そうして朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐつと束を握つて、赤い鞘を向へ払つたら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光った。凄（すこ）いものが手元から、すうすうと逃げて行くように思われる。そうして、ことごとく切先へ集まつて、殺気を一点に籠めてゐる。自分はこの鋭い刃が、無念にも針の頭のように縮められて、九寸五分の先へ来てやむをえず尖つてゐるのを見て、

たちまちぐさりとやりたくなつた。身体からだの血が右の手首の方へ流れて来て、握っている束がにちやにちやする。唇くちびるが顫ふるえた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけておいて、それから全伽ぜんがを組んだ。——趙州じょうしゅう曰く無むと。無とは何だ。糞坊主くそぼうずめとはがみをした。

奥歯を強く咬かみ締しめたので、鼻から熱い息が荒く出る。こめかみが釣かつて痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやつた。

懸物かけものが見える。行灯が見える。畳たたみが見える。和尚の

薬缶頭やかんあたまがありありと見える。

鰐口わにぐちを開いて嘲笑あざわらった声

まで聞える。

怪けしからん坊主だ。どうしてもあの薬缶

を首にしなくてはならん。悟ごつてやる。無むだ、無むだと

舌の根で念じた。無むだと云うのにやつぱり線香の香においがした。何だ線香のくせに。

自分はいきなり拳骨げんこつを固めて自分の頭をいやと云う

ほど擲なぐつた。そうして奥歯をぎりぎりかと噛かんだ。両腋りょうわき

から汗が出る。背中が棒のようになった。膝ひざの接目つぎめが

急に痛くなつた。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。

けれども痛い。苦しい。無むはなかなか出て来

ない。出て来ると思うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜くやしくなる。涙がほろほろ出る。ひと思おもいに身おおいわを巨巖の上おおいわにぶつけて、骨も肉もめちやめちやに碎くだいてしまいたくなる。

それでも我慢してじつと坐っていた。堪たえがたいほど切ないものを胸むねに盛いれて忍しのんでいた。その切ないものが身体からだ中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようと焦あせるけれども、どこも一面に塞ふさがって、まるで出口がないような残刻極まる状態であつた。

そのうちに頭が変になつた。行灯あんどうも蕪村ぶそんの画えも、ちがいだなも、違棚ちがいだなも有つて無いような、無くつて有るように見えた。と云つて無むはちつとも現前げんぜんしない。ただ好加減いいかげんに坐つていたようである。ところへ忽然こつぜん隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はつと思つた。右の手をすぐ短刀にかけた。時計が二つ目をチーンと打つた。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負おぶつてる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰つぶれて、青坊主あおぼうずになつてゐる。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人おとなである。しかも対等たいとうだ。

左右は青田あおたである。路みちは細い。鷺さぎの影が時々闇みに差

す。

「田圃たんぼへかかったね」と背中で云った。

「どうして解る」と顔を後ろうしへ振り向けるようにして聞いたら、

「だって鷺さぎが鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖こわくなつた。こんなものを背負しよつては、この先どうなるか分らない。どこか打遣うっちやる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大き

な森が見えた。あすこならばと考え出す途端とたんに、背中で、

「ふふん」と云う声がした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。ただ

「御父おとつさん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙って森を目標めじるしにあるいて行つた。田の中の路が不規則にうねってなかなか思うように出られない。

しばらくすると二股ふたまたになった。自分は股またの根に立って、ちよつと休んだ。

「石が立ってるはずだがな」と小僧が云った。

なるほど八寸角の石が腰ほどの高さに立っている。表には左り日ヶ窪ひくぼ、右堀田原ほったはらとある。闇やみだのに赤い字あきらが明かに見えた。赤い字は井守いもりの腹のような色であった。

「左が好いだろう」と小僧が命令した。左を見るとさつきの森が闇の影を、高い空から自分らの頭の上へ抛なげかけていた。自分はちよつと躊躇ちゆうちゆうした。

「遠慮しないでもいい」と小僧がまた云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目めくらのくせに何でも知ってるなと考えながら一筋道を森へ近づいてくると、背中で、「どうも盲目は不自由でいけないね」と云った。

「だから負おぶつてやるからいいじゃないか」

「負もらぶつて貰もらつてすまないが、どうも人に馬鹿にされていけない。親にまで馬鹿にされるからいけない」

何だか厭いやになった。早く森へ行つて捨ててしまおうと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。——ちようどこんな晩だったな」と背中で独言ひとりごとのように云っている。

「何が」と際きわどい声を出して聞いた。

「何がって、知ってるじゃないか」と子供は嘲あざけるように答えた。すると何だか知ってるような気がし出した。けれども判然はつきりとは分らない。ただこんな晩であつたように思える。そうしてもう少し行けば分るように思える。分つては大変だから、分らないうちに早く捨ててしまつて、安心しなくつてはならないように思える。自分はますます足を早めた。

雨はさつきから降っている。路はだんだん暗くなる。ほとんど夢中である。ただ背中に小さい小僧がくっついていて、その小僧が自分の過去、現在、未来をことごとく照して、寸分の事実も洩もらさない鏡のように光っている。しかもそれが自分の子である。そうして盲目である。自分はたまらなくなつた。

「ここだ、ここだ。ちようどその杉の根の処だ」

雨の中で小僧の声は判然聞えた。自分は覚ええず留つた。いつしか森の中へ這は入いっていた。一間いっけんばかり先にある黒いものはたしかに小僧の云う通り杉の木と見え

た。

「御父さん、その杉の根の処だったね」

「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。

「文化五年辰年たつどしだろう」

なるほど文化五年辰年らしく思われた。

「御前がおれを殺したのは今からちようど百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前文化五

年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲

目を殺したと云う自覚が、忽然こっぜんとして頭の中に起った。

おれは人殺ひところしであつたんだなと始めて気がついた途端とたんに、

背中の子が急に石地蔵のように重くなった。

第四夜

広い土間の真中に涼み台のようなものを据^すえて、その周囲^{まわり}に小さい床几^{しょうぎ}が並べてある。台は黒光りに光っている。片隅^{かたすみ}には四角な膳^{ぜん}を前に置いて爺^{じい}さんが一人で酒を飲んでゐる。肴^{さかな}は煮しめらしい。

爺さんは酒の加減でなかなか赤くなっている。その上顔中つやつやして皺^{しわ}と云うほどのものはどこにも見当らない。ただ白い髯^{ひげ}をありたけ生^はやしているから

年寄と云う事だけはわかる。自分は子供ながら、この爺さんの年はいくつなんでしょうと思つた。ところへ裏かけひの筧ておけから手桶くに水を汲んで来た神かみさんが、前垂まえだれで手を拭ふきながら、

「御爺さんはいくつかかね」と聞いた。爺さんは頬張ほおぼつた煮込にしめを呑み込んで、

「いくつか忘れたよ」と澄ましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟はさんで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんは茶碗ちやわんのような大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白い髯の間

から吹き出した。すると神さんが、

「御爺さんの家はどこかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、

「臍へその奥だよ」と云つた。神さんは手を細い帯の間に突つっこ込んだまま、

「どこへ行くかね」とまた聞いた。すると爺さんが、また茶碗のような大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前のような息をふうと吹いて、

「あつちへ行くよ」と云つた。

「真直まっすぐかい」と神さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、

障子しょうじを通り越して柳の下を抜けて、河原かわらの方へ真直まっすぐに行つた。

爺さんが表へ出た。自分も後あとから出た。爺さんの腰こしに小さい瓢箪ひょうたんがぶら下がっている。肩から四角な箱を腋わきの下へ釣つるしている。浅黄あさぎの股引ももひきを穿はいて、浅黄の袖そで無しなを着ている。足袋たびだけが黄色い。何だか皮で作つた足袋のように見えた。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四人いた。爺さんは笑いながら腰から浅黄あさぎの手拭てぬぐいを出した。それを肝心かんじん絢よりのように細長く絢よつた。そうして

地面じびたの真中に置いた。それから手拭の周圍まわりに、大きな丸い輪を描かいた。しまいに肩にかけた箱の中から真鍮しんちゆうで製こしらえた飴屋あめやの笛ふえを出した。

「今にその手拭が蛇へびになるから、見ておろう。見ておろう」と繰返くりかえして云った。

子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ていた。「見ておろう、見ておろう、好いか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる廻り出した。自分は手拭ばかり見ていた。けれども手拭はいつこう動かなかった。

爺さんは笛をぴいぴい吹いた。そうして輪の上を何遍も廻った。草鞋わらじを爪つま立てるようになり、拔足つまだをするように、手拭てぬぐいに遠慮えんりょをするように、廻った。怖こわそうにも見えた。面白おもしろそうにもあつた。

やがて爺さんは笛をぴたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱はこの口を開けて、手拭てぬぐいの首くびを、ちよいと撮つまんで、ぽつと放ほうり込こんだ。

「こうしておくよ、箱はこの中で蛇へびになる。今に見せてやる。今に見せてやる」と云いながら、爺さんが真直まぢに歩き出した。柳やなぎの下を抜けて、細い路みちを真直まぢに下りて

行つた。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでも追ついて行つた。爺さんは時々「今になる」と云つたり、「蛇になる」と云つたりして歩いて行く。しまいには、「今になる、蛇になる、」

きつとなる、笛が鳴る、」

と唄うたいながら、とうとう河の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思つていると、爺さんはぎぶぎぶ河の中へ這はい入り出した。始めは膝ひざくらいの深さであつたが、だんだん腰から、胸の方まで水に浸つかつて見えなくなる。それでも爺さん

「深くなる、夜になる、

真直になる」

と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行つた。そうして髯ひげも顔も頭も頭巾ずきんもまるで見えなくなつてしまつた。

自分は爺おやさんが向岸むこうぎしへ上がった時に、蛇を見せるだろうと思つて、蘆あしの鳴る所に立つて、たつた一人いつまでも待つていた。けれども爺さんは、とうとう上がつて来なかつた。

第五夜

こんな夢を見た。

何でもよほど古い事で、神代かみよに近い昔と思われるが、自分が軍いくさをして運悪く敗北まけたために、生擒いけどりになつて、敵の大將の前に引き据すえられた。

41 夢十夜
その頃の人にはみんな背が高かつた。そうして、みんな長い髻つるぎを生はやしていた。革の帯を締しめて、それへ棒のような剣つるぎを釣つるしていた。弓は藤蔓ふじづるの太いのをその

まま用いたように見えた。漆うるしも塗ぬつてなければ磨みがきもかけてない。極きわめて素樸そぼくなものであつた。

敵の大將は、弓の真中を右の手で握にぎつて、その弓を草の上へ突ついて、酒甕さかがめを伏ふせたようなものの上に腰を掛けていた。その顔を見ると、鼻の上で、左右の眉まゆが太く接つ続ながっている。その頃髪剃かみそりと云うものは無論なかつた。

自分は虜とりこだから、腰をかける訳に行かない。草の上に胡坐あぐらをかいていた。足には大きな藁沓わらぐつを穿はいていた。この時代の藁沓は深いものであつた。立つと膝頭ひざがしらまで

来た。その端はしの所は藁わらを少し編あみ残のこして、房ほのように下げて、歩くとばらばら動くようにして、飾りとしていた。

大將は篝火かがりびで自分の顔を見て、死ぬか生きるかと聞いた。これはその頃の習慣で、捕虜とりこにはだれでも一応はこう聞いたものである。生きると答えると降参した意味で、死ぬと云うと屈服くつぷくしないと云う事になる。自分おんは一言死いっぴぬと答えた。大將は草の上に突ついていた弓ゆみを向うへ抛なげて、腰に釣かるした棒ぼうのような剣けんをすりと抜きかけた。それへ風に靡なびいた篝火かがりびが横から吹きつ

けた。自分は右の手を楓かえでのように開いて、掌たなごころを大将の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云う相図である。大将は太い剣をかちやりと鞘さやに収めた。

その頃でも恋はあつた。自分は死ぬ前に一目思う女に逢あいたいと云つた。大将は夜が開けて鶏とりが鳴くまでなら待つと云つた。鶏が鳴くまでに女をここへ呼ばなければならぬ。鶏が鳴いても女が来なければ、自分は逢わずに殺されてしまう。

大将は腰をかけたまま、篝火を眺めている。自分は大きな藁わらぐつ沓を組み合わせたまま、草の上で女を待つて

いる。夜はだんだん更よける。

時々篝火ほのおが崩くずれる音がする。崩れるたびに狼狽うろたえたように焰ほのおが大將になだれかかる。真黒な眉まゆの下で、大將の眼がぴかぴかと光っている。すると誰やら来て、新しい枝をたくさん火の中へ抛なげ込こんで行く。しばらくすると、火がぱちぱちと鳴る。暗闇くらやみを弾はじき返かえすような勇ましい音であつた。

この時女は、裏の櫓ならの木に繋つないである、白い馬を引き出した。鬘たてがみを三度撫なでて高い背にひらりと飛び乗つた。鞍くらもない鐙あぶみもない裸馬はだかうまであつた。長く白い足で、

太腹ふとぼらを蹴けると、馬はいつさんに駆かけ出した。誰かが籥ふえりを継つぎ足たしたので、遠くとほくの空が薄明うすあかりるく見える。馬はこの明あかりるいものを目懸めがけて闇やみの中を飛とんで来る。鼻はなから火の柱はしらのような息いきを二本出いして飛とんで来る。それでも女おんなは細こい足あしでしきりなしに馬の腹はらを蹴けっている。馬は蹄ひづめの音ねが宙そらで鳴なるほど早く飛とんで来る。女の髪かみは吹流ふいりゅうしのように闇やみの中なかに尾おしを曳ひいた。それでもまだ籥かがりのある所ところまで来こられない。

すると真闇まつくらな道みちの傍はたで、たちまちこけこつこうといいう鶏けいの聲こゑがした。女おんなは身みを空様そらさまに、両手りょうてに握にぎった手綱たづな

をうんと控ひかえた。馬は前足の蹄ひづめを堅い岩の上に発矢はっしと刻きざみ込んだ。

こけこつこうと鶏にわとりがまた一声鳴ひとこえいた。

女はあつと云つて、緊しめた手綱を一度に緩ゆるめた。馬は諸膝もろひざを折る。乗つた人と共に真向まともへ前へのめつた。岩の下は深い淵ふちであつた。

蹄あとの跡はいまだに岩の上に残あつてゐる。鶏の鳴く真似まねをしたものは天探女あまのじやくである。この蹄あとの痕あとの岩に刻かたきみつけられている間、天探女は自分の敵かたきである。

第六夜

運慶うんけいが護国寺ごこくじの山門で仁王におうを刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集まつて、しきりに下馬評げばひようをやつていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜ななめに山門の薨いらかを隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗しゅぬりの門が互いに照あり合つてみごとに見える。その上松の位地が好い。門の左の端を眼障めざわりに

ならないように、斜はすに切って行つて、上になるほど幅を広く屋根まで突出つきだしているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。その中うちでも車夫が一番多い。辻待つじまちをして退屈だから立っているに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云っている。

「人間を拵こしらえるよりもよつぽど骨が折れるだろう」とも云っている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫ほる

のかね。へえそうかね。私わつしやまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「どうも強そうですね。なんだつてえますぜ。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつて云いますぜ。何でも日本武尊やまとだけのみことよりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。この男は尻を端折はしよつて、帽子を被かぶらずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓着とんじやくなく鑿のみと槌つちを動かしている。いっこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺あたりをしきりに彫ほり抜ぬいて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子えぼしのようなものを乗せて、素袍すおうだか何だかわからない大きな袖そでを背中せなかで括くくつてゐる。その様子がいかにも古くさい。わいわい云つてる見物人とはまるで釣り合が取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇体ともほとんど感じ得ない様子で一生懸命に彫つてゐる。仰向あおむいてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向い

て、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我れとあるのみと云う態度だ。天晴れだ」と云つて賞め出した。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している」と云つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を豎に返すや否や斜すに、上から槌を打ち下した。

堅い木を一ひと刻きざみに削けずつて、厚い木屑きくずが槌つちの声に応じて飛んだと思つたら、小鼻のおびらつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がつて来た。その刀とうの入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念さしはさを挟さんでおらんように見えた。

「よくああ無造作むぞうさに鑿くわを使つて、思うような眉まみえや鼻ができるものだな」と自分はあるひんまり感心したから独言ひとりごとのように言った。するとさつきひの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿くわで作るんじやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋うまつているのを、鑿くわと槌つちの力で

掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけっして間違うはずはない」と云った。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。はたしてそうなら誰にでもできる事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫ほつてみたくなつたから見物をやめてさつそく家うちへ帰つた。

道具箱から鑿のみと金槌かなづちを持ち出して、裏へ出て見ると、せんだつての暴風あらしで倒れた檜かしを、薪まきにするつもりで、木挽こびきに挽ひかせた手頃な奴やつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢ほいよく彫り始めて

見たが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その次のにも運悪く掘り当てる事ができなかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片かたつ端はしから彫つて見たが、どれもこれも仁王を蔵かくしているのはなかつた。ついに明治の木にはとうてい仁王は埋うまつていないものだど悟つた。それで運慶が今日きょうまで生きている理由もほぼ解つた。

第七夜

何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしの絶間たえまなく黒い煙けぶりを吐いて浪なみを切つて進んで行く。凄じい音すさまである。けれどもど

こへ行くんだか分らない。ただ波の底から焼火箸やけひばしのよ
うな太陽が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしば
らく挂かかっているかと思うと、いつの間にか大きな船を
追い越して、先へ行つてしまう。そうして、しまいに

は焼火箸やけひばしのようにじゅつといつてまた波の底に沈んで行く。そのたんびに蒼い波あおが遠くの向うで、蘇枋すおうの色に沸わき返る。すると船は凄すさまじい音を立ててその跡あとを追おっかけて行く。けれども決して追つかない。

ある時自分は、船の男を捕つかまえて聞いて見た。

「この船は西へ行くんですか」

船の男は怪訝けげんな顔をして、しばらく自分を見ていたが、やがて、

「なぜ」と問い返した。

「落ちて行く日を追かけるようだから」

船の男はからからと笑った。そうして向うの方へ行つてしまった。

「西へ行く日の、果は東か。それは本真か。東出る日の、御里は西か。それも本真か。身は波の上。戢枕。流せ流せ」と囃している。舳へ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太い帆綱を手繰つていた。

自分は大変心細くなつた。いつ陸へ上がれる事か分らない。そうしてどこへ行くのだから知れない。ただ黒い煙を吐いて波を切つて行く事だけはたしかである。その波はすこぶる広いものであつた。際限もなく蒼く

見える。時には紫にもなつた。ただ船の動く周囲だけ
はいつでも真白に泡を吹いていた。自分は大変心細
かつた。こんな船にいるよりいつそ身を投げて死んで
しまおうかと思つた。

乗合はたくさんいた。たいていは異人のようであつ
た。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇つて船が
揺れた時、一人の女が欄に寄りかかつて、しきりに泣
いていた。眼を拭く手巾の色が白く見えた。しかし
身体には更紗のような洋服を着ていた。この女を見た
時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気がつい

た。

ある晩甲板かんばんの上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知ってるかと尋ねた。自分はずまらないから死のうとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。黙っていた。するとその異人が金牛宮きんぎゆうの頂ういただきにある七星しちせいの話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだと言った。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙っていた。

或時サローンに這入はいつたら派手はでな衣裳いしやうを着た若い女

が向うむきになつて、洋琴ピアノを弾ひいていた。その傍そばに背の高い立派な男が立つて、唱歌を唄うたっている。その口が大変大きく見えた。けれども二人は二人以外の事にはまるで頓着とんじやくしていない様子であつた。船に乗つてゐる事さえ忘れてゐるようであつた。

自分はますますつまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板かんばんを離れて、船と縁が切れたその刹那せつなに、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかつたと思つ

た。けれども、もう遅い。自分は厭いやでも応おとでも海の中へ這入らなければならぬ。ただ大変高くできていた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。しかし捕つかまえるものがないから、しだいしだいに水に近づいて来る。いくら足を縮ちぢめても近づいて来る。水の色は黒かった。

そのうち船は例の通り黒い煙けぶりを吐いて、通り過ぎてしまった。自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やつぱり乗っている方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔

と恐怖とを抱いだいて黒い波の方へ静かに落ちて行った。

第八夜

床屋の敷居を跨またいだら、白い着物を着てかたまつていた三四人が、一度にいらつしやいと云つた。

真中に立つて見廻すと、四角な部屋である。窓が二方あに開いて、残る二方に鏡が懸かかつている。鏡の数を勘定かんじょうしたら六つあつた。

69 夢十夜
自分はその一つの前へ来て腰をおろした。すると御尻おしりがぶくりと云つた。よほど坐り心地ごこちが好くできた

椅子である。鏡には自分の顔が立派に映つた。顔の後うしろには窓が見えた。それから帳場格子ちやうぼごうしが斜はすに見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通る往来おうらいの人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎はいつの間にかパナマの帽子を買って被かぶつてゐる。女もいつの間こしに拵こしらえたものやら。ちよつと解らない。双方とも得意のようであつた。よく女の顔を見ようと思つうちに通り過ぎてしまった。

豆腐屋とうふやが喇叭らっぱを吹いて通つた。喇叭を口へあてがつ

ているんで、頬ほっぺたが蜂はちに螫さされたように膨ふくれていた。膨ふくれたまんまで通り越したものだから、気がかりでたまらない。生涯しょうがい蜂はちに螫さされているように思う。

芸者げいしやが出た。まだ御化粧おづくりをしていない。島田の根が緩ゆるんで、何だか頭に締しまりがない。顔も寝ぼけている。色沢いろつやが気の毒なほど悪い。それで御辞儀おじぎをして、どうも何とかですと云ったが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後ろうしろへ来て、鉢はさみと櫛くしを持って自分の頭を眺め出した。自分は薄

い髭ひげを捩ひねつて、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。

白い男は、何なにも云わずに、手に持った琥珀色こはくいろの櫛くしで軽く自分の頭を叩たたいた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちやきちやきと鋏を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見るつもりで眼を睜みはつていたが、鋏の鳴るたんびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉じた。すると白い男が、こう云つた。

「旦那だんなは表の金魚売を御覧なすつたか」

自分は見ないと云つた。白い男はそれぎりあぶねえで、しきりと鋏を鳴らしていた。すると突然大きな声で危険と云つたものがある。はつと眼を開けると、白い男の袖そでの下に自転車の輪が見えた。人力の梶棒かじぼうが見えた。と思うと、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなつた。鋏の音がちやきちやきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻つて、耳の所を刈かり始めた。毛が前の方へ飛ばなくなつたから、安心して

眼を開けた。粟餅あわもちや、餅もちやあ、餅もちや、と云う声がすぐ、そこでする。小さい杵きねをわざと臼うすへあてて、拍子ひょうしを取って餅を搗ついている。粟餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちよつと様子が見たい。けれども粟餅屋はけっして鏡の中に出て来ない。ただ餅を搗く音だけする。

自分はあるたけの視力で鏡の角かどを覗のぞき込むようにして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐っている。色の浅黒い眉毛まみえの濃い大柄おおがらな女で、髪を銀杏いちようがえ返しに結ゆって、黒くろ縷じゆす子の半襟はんえりのかかった素す裕あわせ

で、立膝たてひざのまま、札さつの勘定かんじょうをしている。札は十円札らしい。女は長い睫まつげを伏せて薄い唇くちびるを結んで一生懸命に、札の数を読んでいるが、その読み方がいかにも早い。しかも札の数はどこまで行っても尽きる様子がない。膝ひざの上に乗っているのはたかだか百枚ぐらいだが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分は茫然ぼうぜんとしてこの女の顔と十円札を見つめていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましよう」と云った。ちようどうまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場格子ちようぼうごうしの方をふり返って見た。け

れども格子のうちには女も札も何にも見えなかつた。

代だいを払ひつて表へ出ると、門口かどぐちの左側に、小判こばんなりの

桶おけが五つばかり並べてあつて、その中に赤い金魚や、

斑入ふいりの金魚や、瘦やせた金魚や、肥ふとつた金魚がたくさん

入れてあつた。そうして金魚売がその後うしろにいた。金魚

売は自分の前に並べた金魚を見つめたまま、頬杖ほおづえを突

いて、じつとしてゐる。騒さわがしい往來おうらいの活動にはほと

んど心を留めていない。自分はしばらく立つてこの金

魚売を眺めていた。けれども自分が眺めている間、金

魚売はちつとも動かなかつた。

第九夜

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争いくさが起りそうに見える。焼け出された裸馬はだかうまが、夜昼となく、屋敷まわりの周囲まわりを暴れ廻まわると、それを夜昼となく足軽あしがらども共がひしめ犇おっきながら追おっかけているような心持がする。それでいて家のうちは森しんとして静かである。

家には若い母と三つになる子供がいる。父はどこかへ行つた。父がどこかへ行つたのは、月の出ていない

夜中であつた。床の上で草鞋わらじを穿はいて、黒い頭巾ずきんを被かぶつて、勝手口から出て行つた。その時母の持つていた雪洞ぼんぼりの灯ひが暗い闇やみに細長く射して、生垣いけがきの手前まへにある古い檜ひのきを照らした。

父はそれきり帰つて来なかつた。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。子供は何とも云わなかつた。しばらくしてから「あつち」と答えるようになった。母が「いつ御帰り」と聞いてもやはり「あつち」と答えて笑つていた。その時は母も笑つた。そうして「今に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返

して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えたのみである。時々「御父様はどこ」と聞かれて「今に」と答える事もあつた。

夜になつて、四隣あたりが静まると、母は帯を締め直して、鮫鞘さめざやの短刀を帯の間へ差しして、子供を細帯で背中へ背負しよつて、そつと潜くぐりから出て行く。母はいつでも草履ぞうりを穿はいていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の背中で寝てしまふ事もあつた。

土塀つちべいの続ついている屋敷町を西へ下くだつて、だらだら坂を降おり尽つくすと、大きな銀杏いちようがある。この銀杏を目標めじるし

に右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃たんぼで、片側は熊笹くまざさばかりの中を鳥居まで来て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立こだちになる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き当たると、古い拜殿の階段の下に出る。鼠色ねずみいろに洗い出された賽銭箱さいせんぼこの上に、大きな鈴の紐ひもがぶら下がって昼間見ると、その鈴の傍そばに八幡宮はちまんぐうと云う額かかが懸かつている。八の字が、鳩ほとが二羽向いあつたような書体にできているのが面白い。そのほかにいろいろの額かかがある。たいていは家中かちゆうのもの射抜いた金的きんてきを、射抜いたものの名前に添えたのが多

い。たまには太刀たちを納めたのもある。

鳥居を潜くぐると杉こすげの梢こすげでいつでも梟ふくろうが鳴いている。そ

うして、冷飯草履ひやめしぞうりの音がびちやびちやする。それが拝

殿の前でやむと、母はまず鈴を鳴らしておいて、すぐ

にしやがんで柏手かしわでを打つ。たいていはこの時梟が急に

鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈

る。母の考えでは、夫が侍さむらいであるから、弓矢の神の

八幡はちまんへ、こうやって是非ない願がんをかけたら、よもや聴き

かれぬ道理はなからうと一凶いちずに思いつめている。

子供はよくこの鈴の音で眼を覚さまして、四辺あたりを見る

と真暗なものだから、急に背中で泣き出す事がある。その時母は口の内では何か祈りながら、背を振つてあやそうとする。すると旨く泣きやむ事もある。またますます烈しく泣き立てる事もある。いずれにしても母は容易に立たない。

一ひととお通り夫の身の上を祈つてしまふと、今度は細帯を解いて、背中の子を摺りおろすように、背中から前へ廻して、両手に抱きながら拜殿を上つて行つて、「好い子だから、少しの間、待つておいでよ」ときつと自分の頬を子供の頬へ擦りつける。そうして細帯を長くし

て、子供を縛しばつておいて、その片端を拜殿の欄干らんかんに括くくりつける。それから段々を下りて来て二十間の敷石を往つたり来たり御百度おひやくどを踏む。

拜殿に括くくりつけられた子は、暗闇くらやみの中で、細帯たけの丈のゆるす限り、広縁の上を這はい廻まわっている。そう云う時は母にとって、はなはだ楽らくな夜である。けれども縛しばつた子にひいひい泣かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方のない時は、途中で拜殿へ上あがつて来て、いろいろすかしておいて、また御百度を踏み直す事もある。

こう云う風に、幾晩となく母が気を揉もんで、夜よの目も寝ずずに心配していた父は、とくの昔に浪士ろうしのために殺ころされていたのである。

こんな悲かなしい話を、夢の中で母から聞いた。

第十夜

庄太郎が女に攫さらわれてから七日目の晩にふらりと帰って来て、急に熱が出てどつと、床に就ついていると云って健けんさんが知らせに来た。

庄太郎は町内一の好男子こうだんしで、至極しごく善良な正直者である。ただ一つの道楽がある。パナマの帽子を被かぶつて、夕方になると水菓子屋みずがしやの店先へ腰をかけて、往來おうらいの女の顔を眺めている。そうしてしきりに感心している。

そのほかにはこれと云うほどの特色もない。

あまり女が通らない時は、往来を見ないで水菓子を
見ている。水菓子にはいろいろある。水蜜桃すいみつとうや、林檎りんご
や、枇杷びわや、バナナを綺麗きれいに籠かごに盛つて、すぐ見舞物みやげもの
に持つて行けるように二列に並べてある。庄太郎はこ
の籠かごを見ては綺麗きれいだと云っている。商売をするなら水
菓子屋に限ると云っている。そのくせ自分はパナマの
帽子を被つてぶらぶら遊んでいる。

この色がいいと云つて、夏蜜柑なつみかんなどを品評する事も
ある。けれども、かつてぜに銭を出して水菓子を買った事

がない。ただでは無論食わない。色ばかり賞^ほめてい
る。ある夕方一人の女が、不意に店先に立った。身分の
ある人と見えて立派な服装をしている。その着物の色
がひどく庄太郎の気に入った。その上庄太郎は大変女
の顔に感心してしまった。そこで大事なパナマの帽子
を脱^とつて丁寧^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}をしたら、女は籠詰^{かごづめ}の一番大きい
のを指^さして、これを下さいと云うんで、庄太郎はすぐ
その籠を取って渡した。すると女はそれをちよつと提^さ
げて見て、大変重い事と云った。

庄太郎は元来閑人^{ひまじん}の上に、すこぶる気作^{きさく}な男だから、

ではお宅まで持つて参りましょうと云つて、女といつしよに水菓子屋を出た。それぎり帰つて来なかつた。

いかな庄太郎でも、あんまり呑気過ぎる。のんき只事ただごとじや

無かろうと云つて、親類や友達が騒ぎ出していると、七日目の晩になつて、ふらりと帰つて来た。そこで大勢寄つてたかつて、庄さんどこへ行つていたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乗つて山へ行つたんだと答えた。

何でもよほど長い電車に違いない。庄太郎の云うところによると、電車を下りるとすぐと原へ出たそうで

ある。非常に広い原で、どこを見廻しても青い草ばかり生はえていた。女といつしよに草の上を歩いて行くと、急に絶壁きりぎしの天辺てっぺんへ出た。その時女が庄太郎に、ここから飛び込んで御覧なさいと云った。底を覗のぞいて見ると、切岸きりぎしは見えるが底は見えない。庄太郎はまたパナマの帽子を脱いで再三辞退した。すると女が、もし思い切つて飛び込まなければ、豚ぶたに舐なめられますが好うござんすかと聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門が大嫌だいきらひだつた。けれども命には易かえられないと思つて、やつぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴

らして来た。庄太郎は仕方なしに、持つていた細い
檳榔樹びんろうじゆの洋杖ステツキで、豚の鼻頭はなづらを打ぶつた。豚はぐうと云い
ながら、ころりと引ひつ繰くり返かえつて、絶壁の下へ落ちて
行つた。庄太郎はほつと一ひと息接いきついでいるとまた一匹
の豚が大きな鼻を庄太郎に擦すりつけに来た。庄太郎は
やむをえずまた洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いて
また真逆まつさかさま様に穴の底へ転ころげ込んだ。するとまた一匹あ
らわれた。この時庄太郎はふと気がついて、向うを見
ると、遥はるかの青草原の尽あたりきる辺から幾万匹か数え切れぬ
豚が、群むれをなして一直線に、この絶壁の上に立ってい

る庄太郎を目懸めがけて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心しんから恐縮した。けれども仕方がないから、近寄ちかつてくる豚の鼻頭を、一つ一つ丁寧ていねいに檳榔樹の洋杖で打つていた。不思議な事に洋杖が鼻へ触さわりさえすれば豚はこりりと谷の底へ落ちて行く。覗のぞいて見ると底の見えない絶壁さかを、逆さかさになつた豚が行列して落ちて行く。自分がこのくらい多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながら怖こわくなつた。けれども豚は続々くる。黒雲に足が生はえて、青草を踏み分けるような勢いで無むじんぞう尽蔵に鼻を鳴らしてくる。

庄太郎は必死の勇をふるつて、豚の鼻頭をなにかむぼんたた七日六晩叩いた。けれども、とうとう精根が尽きて、手がこんにやく蒟蒻のように弱つて、しまいに豚に舐なめられてしまった。そうして絶壁の上へ倒れた。

健さんは、庄太郎の話をここまですて、だからあんまり女を見るのは善よくないよと云つた。自分ももつともだと思つた。けれども健さんは庄太郎のパナマの帽子が貰もらいたいと云つていた。

庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだろう。



夢十夜
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「夏目漱石全集 10 巻」ちくま文庫、筑摩書房

1988 (昭和 63) 年 7 月 26 日第 1 刷発行

1996 (平成 8) 年 7 月 15 日第 5 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971 (昭和 46) 年 4 月～1972 (昭和 47) 年 1 月

入力：野口英司

1997 年 12 月 16 日公開

2004 年 2 月 28 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ